

古代  
体験

# マニュアル

Vol.5 古代の技「編む」に挑戦!



# はじめに

島根県教育庁埋蔵文化財調査センターでは、「心に残る文化財子ども塾」を始め様々な文化財普及活動を行っております。この「古代体験マニュアル」は子ども塾等で培った古代体験メニューを学校などでも実施できるよう解説したマニュアルです。学校で、地域の体験学習で、様々な機会に御活用いただき、「古代」に触れる一助になれば幸いに存じます。

島根県教育庁埋蔵文化財調査センター所長

## 1. 現代に受け継がれた縄文時代の「編む」技術

皆さんが日頃目にする籠や箆などの「編み物」は、古代から受け継がれている「編む」技術によってつくられたものなのです。古代の人々は、植物の蔓をそのまま使ったり、細く裂いて紐のようにしたりして、籠や網などを編んでいました。彼らは、生きていくために必要な道具を「編む」ことによって作り出していました。

ところで、「編む」技術はいつ頃からあったのでしょうか？植物の蔓や繊維が原料となっている編み物は、土器などと違いすぐに腐ってしまうため、発掘調査で出土することは、ほとんどありません。

今のところ旧石器時代に「編む」技術があったかどうかは、はっきりしません。ただ、縄文時代の初め頃(約1万年前)には、既に「編む」技術があったことがわかっています。それは、遺跡から出土した縄文土器の底に、土器をつくる時に下に敷いた敷物の編み目がついていることがあるからです。島根県で出土した縄文時代の土器にも、編み物の跡がついたものがあります。

縄文時代の編み物には様々な編み方が見られますが、少なくとも2種類の編み方が確立されていたようです。一つは「網代編み」という縦材と横材を密に編み込んでいく編み方です。植物の蔓を素材としたものは型崩れしにくいので籠づくりに利用され、イネ科植物の繊維を素材としたものは、しなやかに使えるためポシェットのような籠として利用されていました。もう一つは、「もじり編み」という縦材を横材で結び合わせていく編み方です。木材を割り裂いたものなどを素材としています。素材が固く変形しにくいので、大型の籠や箆づくりに利用されました。

また、魚を捕る現代の網も、縄文時代の網と同じ編み方でつくられています。これらの縄文時代の「編む」技術は、弥生時代や古墳時代はもちろんのこと、現代にも受け継がれているのです。

## 2. 「食」と編み物

縄文時代の食べ物に関する編み物には、網代や籠、魚を捕るための網・簾状の編み物などがあります。網代は敷物として使われましたが、ドングリをたくわえておくために掘った穴(貯蔵穴)に敷いたり、蓋のようにおおったりした状態で見つかることがあります。また、植物の蔓で編んだ籠が、青森県の三内丸山遺跡で出土しています。これも幅広い使われ方をされたようですが、木の実や野草、貝などを採って集めるのに便利だったと考えられます。鳥取県桂見遺跡では、木の実の天日干しに利用されたと考えられる直径60cm前後の箆形をした編み物が出土しています。一方、現在の章簾とほぼ同じ、簾状の編み物も出土しています。簾状の編み物は、住居の屋根材や木の実・魚肉などの干し台などに利用されていたと考えられます。また、漁にも利用されていたと考えられ、縄文時代の生活を支える重要な役目があったと考えられます。その他、魚を捕るための道具である「たも網」や仕掛け漁に使う「笠」(魚を誘い込むための筒状の編み物)も出土しています。このことから、縄文時代には多様な漁業の技術が完成していた可能性が考えられます。



簾：長さ260cm (新潟県青田遺跡・縄文時代晩期)  
写真：新潟県教育委員会提供



籠(左)・たも網(右)  
愛媛県舟ヶ谷遺跡・縄文時代後期  
写真：愛媛県歴史文化博物館提供



編布の圧痕が見られる縄文土器  
(島根県下山遺跡・縄文時代後期中葉～晩期)



袋状編み物製品：幅約10cm  
(青森県三内丸山遺跡・縄文時代晩期)  
青森県教育庁文化財保護課三内丸山遺跡対策室所蔵

## 3. 「衣」と編み物

「編む」技術で様々な日常生活用具をつくっていた縄文時代、彼らの衣服もまた「編む」技術でつくられていたのでしょうか？

実際、縄文時代には、「編布」と呼ばれる「編む」技術でつくられた布がありました。縄文時代の土偶には、編布のような衣服が表現されたものもあります。このことから縄文人はこの編布を使って衣服をつくったという考え方があります。また、編布にはニカワで彩色したものも出土しており、衣服に使用された可能性は十分に考えられます。その他、獣の皮も衣服に利用されていた可能性があります。

その後、縄文時代の終わり頃から弥生時代の初め頃に、織機と糸を使って布を「織る」技術が、米作りとともに朝鮮半島から伝えられました。これ以後、編布に代わってこの新しい技術で作られた織布が衣服にも使用され、やがて主流となっていきます。なお、編布の技術は「越後アンギン」などとして、現代にも受け継がれています。



土偶：高さ18.2cm  
(北海道初田牛20遺跡・縄文時代後期末～晩期)  
根室市博物館開設準備室所蔵

## 4. 「編む」技術が見つかった各地の遺跡

島根県内から出土する縄文時代の「編み物」の数は非常に限られています。ここでは全国各地で出土した、縄文時代～古墳時代の「編み物」をいくつか紹介します。北は北海道から南は九州まで、「編む」技術が見つかっています。

籠状繊維製品、笠、編布 他出土  
(北海道忍路土場遺跡・縄文時代後期)

編み物  
(鳥取県青谷上寺地遺跡・弥生時代後期)  
写真：鳥取県教育委員会事務局文化課提供

赤漆塗り糸玉 (装飾品か?)  
直径1.2cm、長さ2.7cm  
(新潟県青田遺跡・縄文時代晩期)  
写真：新潟県教育委員会提供

35点の網代、多数の有機物が出土  
(東京都下宅部遺跡・縄文時代後期の水場遺構)

多数の編み物製品出土  
(福井県鳥浜貝塚・縄文時代早期～晩期)

漆塗籠棺 (破片、漆で固めた籠の棺)  
(大阪府塚廻古墳・古墳時代終末期)  
写真：大阪府立近つ飛鳥博物館提供

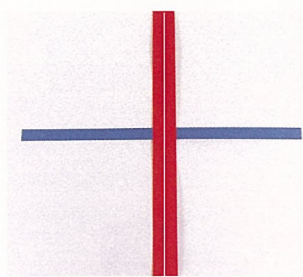
網代 (貯蔵穴の底に敷かれていたもの)  
(島根県三田谷I遺跡・縄文時代後期)

ざる  
(長崎県里田原遺跡・縄文時代後期～弥生時代前期)  
写真：長崎県教育庁学芸文化課提供

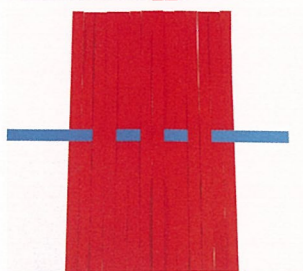
# あじろ 網代編みにチャレンジしよう!

網代編みによる縄文時代の籠や敷物が全国で出土しています。ここでは、「花びんしき」をつくって網代編みの技に挑戦しましょう。網代編みをマスターしたら、前のページに載っていた「縄文ポシェット」に挑戦してみよう。三内丸山遺跡で出土したポシェットのような籠は、材料ははっきりしていませんが、イグサ科の植物を使い、「網代編み」で編まれていました。ここでは、網代編みが習得しやすいように紙の素材を使って体験してみましょう。

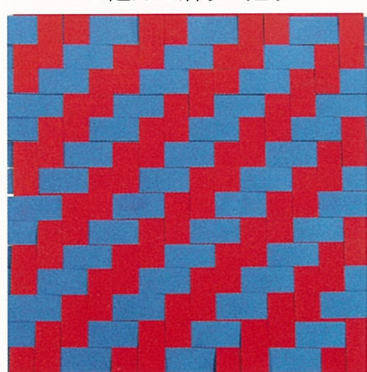
## 1. 花びんしきをつくらう



① 縦紐2本を横紐の中央に十字になるように接着剤ではる。(直角になるようにする。)



2 越え 2 潜り 1 送り

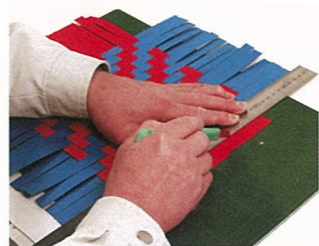


② ①の縦紐の左右に残りの縦紐を2本ずつ上下になるように隙間なくはり合わせる。

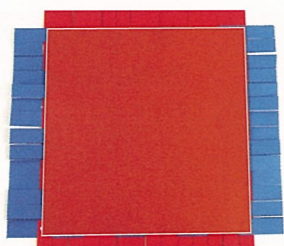
③ ②の横紐の上方向に毎段右に1本ずらせて、網代編み(2越え2潜り1送り)を7段編む。次に下方向に左に1本ずらせて6段編む。

用意するもの  
色画用紙2色(B4サイズ)  
※1.5cm幅の縦紐7本、横紐7本ずつ。  
裏紙(厚紙)、カッター、接着剤、定規

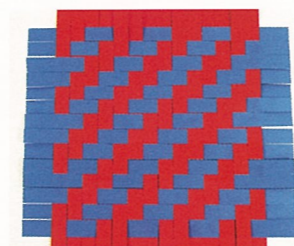
④ 編み終わったら端を接着剤でとめ、2cm残して切りそろえる。



⑤ 裏に厚紙をはる。



⑥ できあがり!



この冊子では、網代編みの用語を次のように呼んでいます。  
「越える」……紐の上側に編むこと。  
「潜る」……紐の下側に編むこと。  
「送る」……斜めに模様はずれること。  
それぞれの数を変えたいろいろな網代編みが全国で出土しています。

## 2. ポシェットをつくらう

用意するもの  
クラフトバンド(1.5cm幅)  
底紐(60cm)16本(縦紐8本、横紐8本)  
側面の組み紐(52cm)10本  
※2cm重ねて接着剤ではり、円周50cmの輪にする。  
口縁紐(52cm)1本  
荷造り紐、洗濯バサミ、接着剤、はさみ

紐が重なったり、隙間が空いたりしないように、ところどころを接着剤と洗濯バサミでとめると、きちんと編めます。



① 縦紐8本、横紐8本で、上記の花びんしきの編み方で底を編む。(最初の横紐の上方向に4段、下方向に3段編む。)  
② 底紐を立ち上げ側面を1段ずつ輪にした紐で、網代編み(2越え2潜り1送り)に編む。  
③ 側面を編み終わったら、2cmで切りそろえ、すべて内側に折り、接着剤ではりあわせる。

④ 持ち手の組紐を編んで、籠の内側にテープで固定し、その上から接着剤で口縁の内側に紐をはる。(組紐の作り方は次のページに載っています。)

# つる 蔓で編んでみよう!

## 1. かごをつくらう

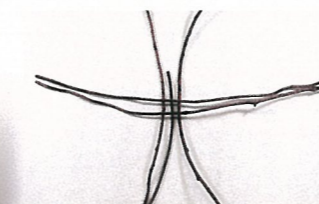
縄文時代の編み方の技術は現代に受け継がれています。ここでは、アケビの蔓を使った簡単な編み方を紹介します。

【材料】  
アケビの蔓(直径8mm以下のもの)  
芯(75cm)4本  
芯(50cm)1本  
編み材(適当な長さ)  
園芸用はさみ  
\*蔓は、一晩湯か水につけておく。

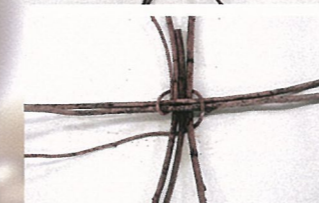


アケビ

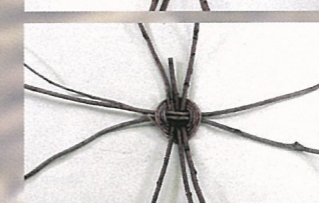
あみかご 編籠: 直径15cm  
(佐賀県坂ノ下遺跡・縄文時代中期)  
写真: 佐賀県立博物館提供



① 芯を2本ずつ十字に並べ、短い芯1本を間にはさむ。



② 芯の四方を編み材でしっかりと締める。(巻き始めは、細めの蔓が編みやすい。)



③ 編み材で4回巻いた後、芯を放射状に広げ、編み材を上、下、上、...とかけて編む。



④ 直径が15cmになったら、底の出来上がり。



⑤ 芯をしっかり立ち上げ、編み材を外、内、外、...とかけて編む。



⑥ 側面を編み終わったら、左側の芯を右側の芯の外側から差し込み、端を始末する。



☆ 編んでいる途中で編み材が短くなったら、新しい編み材を芯の上で、2cmほど交差させて、編み続け、端は後でさし込む。

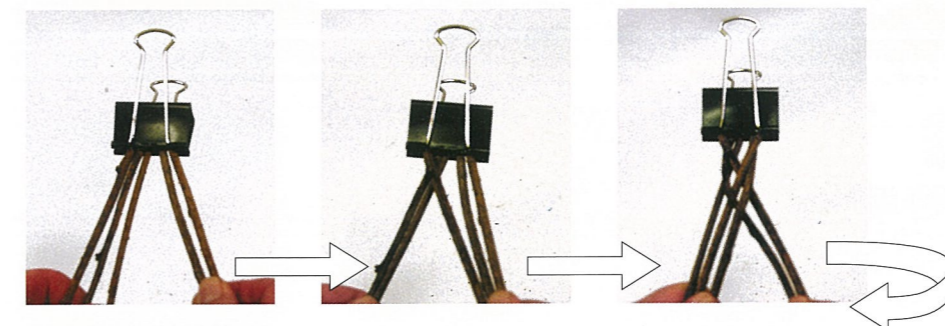


⑦ 完成!  
(もち手を工夫してつけてみるのもいい。)

## くみひも 2. 組紐をつくらう

青森県の三内丸山遺跡では、縄文時代の組紐も見つかっています。10本の蔓を2本1組で5本編みにしていました。ここでは、細い蔓5本で、組紐をつくってみましょう。

- ① 5本の蔓の端をまとめて結び、3本と2本にわける。
- ② 3本の方の一番外側を2本の内側に組み込む。
- ③ 新たに3本になった方の一番外側を2本の内側に組み込む。
- ④ この作業を繰り返す。



つる 蔓製の組紐  
(青森県三内丸山遺跡・縄文時代)  
青森県教育庁文化財保護課三内丸山遺跡対策室所蔵

# あんぎん 編布にチャレンジしよう!

右の写真は縄文時代の遺跡から発見された「編布」の一部とされているものです。「編布」は、横糸1本に縦糸を絡ませて編みます。道具は残っていないのですが、越後アングンの製法などを考えあわせ、下図のような道具を用いてつくられていたのではないかと想像されています。



編布の断片(福井県鳥浜貝塚・縄文時代)  
写真: 福井県立若狭歴史民俗資料館提供

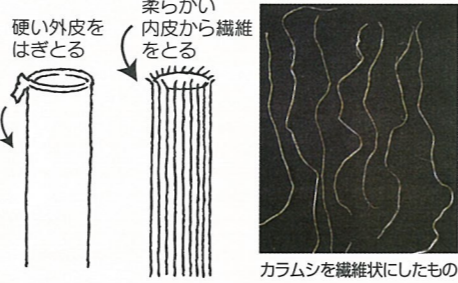
## 1. 糸をよる

「編布」はカラムシ・アサ・クズ・コウゾ・アカソなどの植物繊維を柔らかくしたものを手でほぐし、糸によったものを材料として利用していたようです。ここでは、カラムシから繊維をとる方法を紹介します。

- ① 刈り取ったカラムシを水に約2日間ひたし、アクを抜く。
- ② カラムシの中ほどを折って、柔らかくなった外皮をはぎとり、再び水につけ込む。
- ③ 内皮が柔らかくなったら、繊維部分をはぎとる。
- ④ 2、3日陰干しし、繊維を指でより、ある程度の長さにつなぐ。

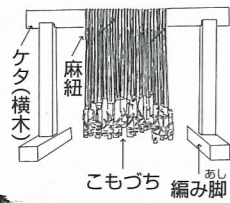


自生しているカラムシ



カラムシを繊維状にしたもの

## 2. 材料と道具 (今回は身近な麻紐を利用することにしましょう!)



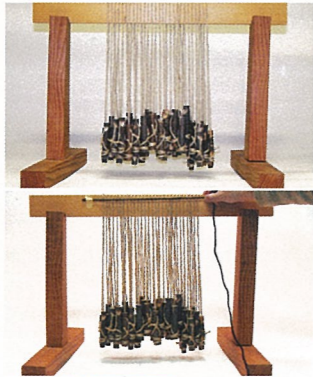
- ・こもづち 40個 (20組)  
(直径2cm×長さ7cmの丸木)
- ・ケタ(横木) 1本  
(幅6cm×50cm)  
(1cm幅のキザミ20列)
- ・編み脚 1組  
(高さ45cm横幅30cm程度)
- ・太い麻紐(横糸用) 6m 1本
- ・細い麻紐(縦糸用) 90cm 20本

### 《こもづちの結び方》



## 3. 編み方

- ① こもづちに糸を通してとめ、縦糸の中心が編む人の手前側にくるようケタのキザミにかける。
- ② 横糸の端をテープでとめ、縦糸が横糸の上にくるように置く。
- ③ 手前のこもづちをキザミにかかっている糸の右側にくるよう上から向こう側へもっていく。
- ④ ③の時、対になっている向こう側のこもづちを手前側へ上からもってくる。(図のようにケタの上で糸が絡む。)



- ⑤ 1段編めたら、端の長さを考えて、横糸を上向きに反転させ、次の段の横糸を絡めていく。
- ⑥ 後は、この作業を繰り返す。(編むにつれ、横糸をとめていたテープをはがし、徐々に下へずらしていく。)
- ⑦ めざす長さになったら、縦糸をしっかり2度結びする。(ほどけることがあるので短く切らない。)



完成

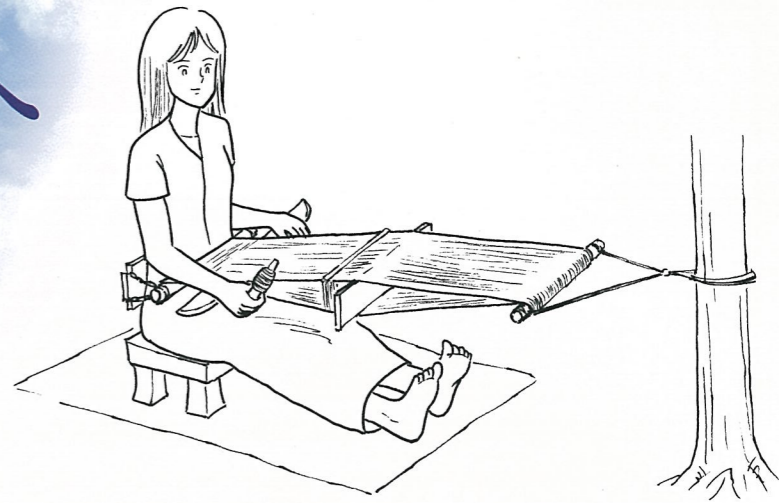


★ できあがりの大きさは縦糸の本数、横糸の折り返し回数で調節できるよ!(縦8列、横10回の折り返しなら30分ぐらいでできるよ!)

# 編み物から織物へ

## ～大陸から伝わった機織り～

弥生時代になると、編布は衰退し、紡績技術と機織機による布づくりが水田稲作とともに大陸から伝わり、織物の時代となりました。材質も絹が登場し、絹に染色したのも出土しています。機械は、経糸を上下に二分し、上糸と下糸の間に緯糸を通し、手元に打ち寄せるといった作業を繰り返して布を織り上げたと推定されます。



弥生時代の機織りの想像図

## ● 弥生時代の衣服

3世紀の倭国の情勢を伝える中国の歴史書『三国誌』のなかの『魏志』倭人伝には、「麻を植え、蚕を養って絹をつくった。」「男子は横幅とよばれる結び束ねた布を身にまとっている。婦人は、布の中央に穴をあけて、そこから頭を出して衣服としている。」と書かれています。

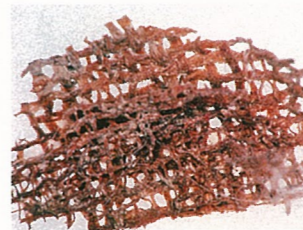
弥生時代の一般庶民が着ていた衣服は、カラムシや大麻などからとった繊維を糸にして、機織機で織った布を縫い合わせて身に付け、身分が高い人々は染色されたカラフルな絹織物の衣服を身につけていたと考えられます。



弥生時代の上層人の復元衣服  
写真: 佐賀県教育委員会提供



弥生時代の庶民の復元衣服  
写真: 佐賀県教育委員会提供



染色された絹織物  
(佐賀県吉野ヶ里遺跡・弥生時代)  
写真: 佐賀県教育委員会提供

絹織物の断片



針と針入れ

糸巻き



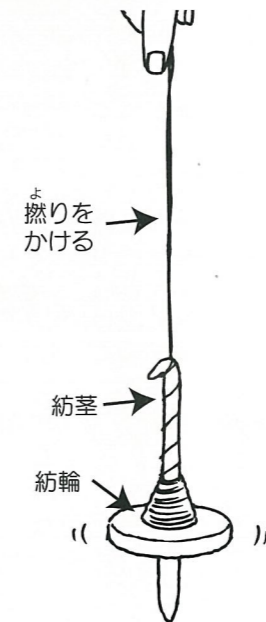
(鳥取県青谷上寺地遺跡・弥生時代)  
写真: 鳥取県教育委員会事務局文化課提供

## ● 糸を紡ぐ道具 ～紡錘車～

弥生時代になると、縄文時代より細長く丈夫な糸を紡ぐようになります。そのための道具が「紡錘車」です。

紡錘車は「紡莖」と「紡輪」よりなり、紡莖は糸を巻きつけるための棒、紡輪は回転させるための錘となります。紡錘車には、石製・木製・土製・土器片製(土器をリサイクルした物)などがあります。紡莖部分は木製であったため、出土例は多くありません。

弥生時代以降になると、金属製の紡錘車も使われるようになりました。



石製紡錘車

①② (鳥根県岩屋口南遺跡・古墳時代)

③ (鳥根県福富I遺跡・古墳時代)



鉄製紡錘車

(鳥根県神原I遺跡・奈良時代)

いとおつむ

# 糸紡ぎにチャレンジしよう!

ほうすいしゃ

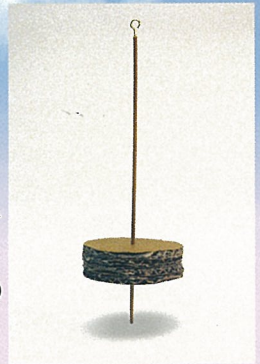
## 1. 紡錘車をつくる

～簡単に出来る紡錘車～

＜材料＞

丸材 30cm (直径 7mm 程度の竹ひご)  
段ボール、金具  
カラムシの糸 (湿らせておく)

- ① 段ボールを直径 10 cm 程度の円形に切り出し、4～5 枚つくる。それらを接着剤ではり合わせて、厚い 1 枚の紡輪にする。(錘の役目をする物なので、接着剤を大目に塗って重ねる。)
- ② 紡輪の中心に丸材を通し、紡輪にしっかり固定する。(下から 5cm 程度の所に接着剤でとめる。)
- ③ 紡茎の最上部に糸を引っ掛けるための金具をねじ込む。



## 2. 糸を紡ぐ

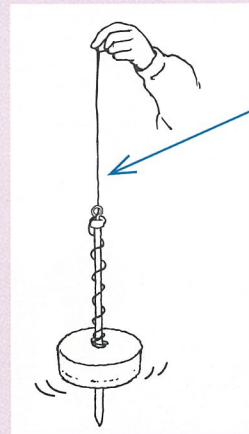
～紡錘車を使って糸を紡いでみよう～

- ① 「編布」のページで紹介したカラムシの糸を、燃つつなぎ、一定の長さの糸にする。

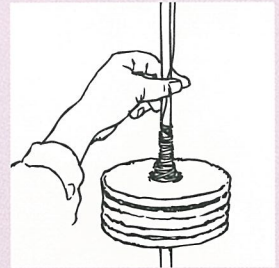


- ② 紡輪との接点付近の紡茎にカラムシの糸をしっかりと結び付ける。

- ③ 紡茎の最上部の金具にカラムシの糸を引っ掛ける。



金具と指でつまんだ部分との間の糸が燃れた状態になる。



- ④ 紡茎の最上部より 30cm 程度上をつまみ、紡輪の重さを利用してこまを回すように回転させる。

- ⑤ 燃れた糸を金具からはずし紡茎の根元部分に巻きつけ、再び③～⑤の作業を繰り返す。

※ すべての糸を紡錘車に巻き付けたら終了。

### ■参考文献

- 尾関清子 「古より美しさと実用性を追求した織物・染物の歴史 衣服」『復元技術と暮らしの日本史』別冊歴史読本 50 1998 新人物往来社
- 大田区立郷土博物館 『ものづくりの考古学 ー原始・古代の人々の知恵と工夫ー』2001 東京美術
- 岩永省三 「弥生人の装い」『古代史復元 5 弥生人の造形』1989 講談社
- 小笠原好彦 「編物・布」『縄文文化の研究 7 道具と技術』1995 雄山閣出版社
- 青森県教育庁文化課三内丸山遺跡対策室 三内丸山遺跡の体験資料
- 山梨県立考古博物館 『チャレンジ考古学 ～学んで、作って、多くを知ろう～』1999
- (財) 仙台市歴史文化事業団、仙台市富沢遺跡保存館 『平成 13 年度特別企画展 編む・組む 一技の考古学』2001
- 谷川栄子 『あけびを編む』1999 農山漁村文化協会
- 山田昌久 「遺物研究 植物質製品(木製品・繊維製品・施設材)」『縄文時代研究の 100 年』第 4 分冊 1999 縄文時代研究会
- 藤沼昌泰 「関東の低湿地遺跡」、久保稔二郎 「山陰の低湿地遺跡」『季刊 考古学』第 73 号 2000 雄山閣出版社
- (財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団・新潟県教育委員会 (財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団設立 10 周年記念公開シンポジウム「よみがえる青田遺跡」資料集『川辺の縄文集落』2002
- (財) 北海道埋蔵文化財センター 『小樽市忍路土場遺跡・忍路 5 遺跡』1989
- 山田昌久編 『考古資料大観 8 弥生・古墳時代 木・繊維製品』2003 小学館
- 布目順郎 『倭人の絹 弥生時代の織物文化』1995 小学館
- 坪井清定編 『新版 日本生活文化史 第 1 巻 日本生活の母胎』1993 河出書房新社

埋文センターは、これまでに、古代体験マニュアルを 4 巻発行しています。あわせて御活用ください。

- Vol. 1 「野焼きで作る縄文土器」
- Vol. 2 「縄文風ドングリ料理をつくらう」
- Vol. 3 「火おこしに挑戦!!」
- Vol. 4 古代のアクセサリ「勾玉づくりに挑戦!!」

これらの冊子についての御意見・御質問、発掘調査や埋蔵文化財についての御質問などがありましたら、お気軽に御連絡ください。

### ■御協力いただいた方々・機関

小川 忠博 (写真家)・永嶋 正春 (国立歴史民俗博物館)・青森県教育庁文化財保護課三内丸山遺跡対策室・八戸市縄文学習館・愛媛県教育委員会文化財保護課・愛媛県歴史文化博物館・大阪府立近つ飛鳥博物館・佐賀県教育庁文化課・佐賀県立博物館・長崎県教育庁学芸文化課・田平町立里田原歴史民俗資料館・鳥取県教育委員会事務局文化課妻木晚田・青谷上寺地遺跡整備室・淀江町教育委員会・新潟県教育庁文化行政課・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団・根室市博物館開設準備室・福井県立若狭歴史民俗資料館・かずら工房 かごや (順不同・敬称略)

## 「古代の技『編む』に挑戦!!」

2004 年 3 月

島根県教育庁埋蔵文化財調査センター 発行  
〒 690-0131 島根県松江市打出町 33

TEL 0852-36-8608

FAX 0852-36-8025

ホームページ

<http://www.pref.shimane.jp/section/maibun/>

Eメール [maibun@pref.shimane.jp](mailto:maibun@pref.shimane.jp)